

司式: 吉田千鶴子
奏楽: 堀口 恵美

前奏: 「神もしこれらの日々我らと共にいませずば」 (J.N. ハンフ)

招詞: 眠りにについている者、起きよ。死者の中から立ち上がれ。そうすれば、キリストはあなたを照らされる。(エフェ5:14)

讃美歌 51「愛するイエスよ」

交読詩編: 122【都に上る歌。ダビデの詩。】

- 01 主の家に行こう、と人々が言ったとき/わたしはうれしかった。
- 02 エルサレムよ、あなたの城門の中に/わたしたちの足は立っている。
- 03 エルサレム、都として建てられた町。そこに、すべては結び合い
- 04 そこに、すべての部族、主の部族は上って来る。主の御名に感謝をささげるのはイスラエルの定め。
- 05 そこにこそ、裁きの王座が/ダビデの家の王座が据えられている。
- 06 エルサレムの平和を求めよう。「あなたを愛する人々に平安があるように。
- 07 あなたの城壁のうちに平和があるように。あなたの城郭のうちに平安があるように。」
- 08 わたしは言おう、わたしの兄弟、友のために。「あなたのうちに平和があるように。」
- 09 わたしは願おう/わたしたちの神、主の家のために。「あなたに幸いがあるように。」

朗読聖書①ノバクク書 2:1-4

- 01 わたしは歩哨の部署につき
砦の上に立って見張り
神がわたしに何を語り
わたしの訴えに何と答えられるかを見よう。
- 02 主はわたしに答えて、言われた。
「幻」を書き記せ。
走りながらでも読めるように
板の上にはっきりと記せ。
- 03 定められた時のために
もうひとつの幻があるからだ。
それは終わりの時に向かって急ぐ。
人を欺くことはない。
たとえ、遅くなくても、待っておれ。
それは必ず来る、遅れることはない。
- 04 見よ、高慢な者を。
彼の心は正しくありえない。
しかし、神に従う人は信仰によって生きる。」

朗読聖書②コリントの信徒への手紙一 16:13-24(最終)

◆結びの言葉

- 13 目を覚ましていなさい。信仰に基づいてしっかり立ちなさい。雄々しく強く生きなさい。
- 14 何事も愛をもって行いなさい。
- 15 兄弟たち、お願いします。あなたがたも知っているように、ステファナの一家は、アカイア州の初穂で、聖なる者たちに対して労を惜みず世話をしてくれました。
- 16 どうか、あなたがたもこの人たちが、彼らと一緒に働き、労苦してきたすべての人々に従ってください。
- 17 ステファナ、フォルトナト、アカイコが来てくれたので、大変うれしく思っています。この人たちは、あなたがたのいないときに、代わりを務めてくれました。
- 18 わたしとあなたがたを元気づけてくれたのです。このような人々を重んじてください。
- 19 アジア州の諸教会があなたがたによろしくと言っています。アキラとプリスカが、その

- 家に来る教会の人々と共に、主においてあなたがたにくれぐれもよろしくとのことです。
- 20 すべての兄弟があなたがたによろしくと言っています。あなたがたも、聖なる口づけによって互いに挨拶を交わしなさい。
 - 21 わたしパウロが、自分の手で挨拶を記します。
 - 22 主を愛さない者は、神から見捨てられるがいい。マラナ・タ (主よ、来てください)。
 - 23 主イエスの恵みが、あなたがたと共にあるように。
 - 24 わたしの愛が、キリスト・イエスにおいてあなたがた一同と共にあるように。

祈祷

愛と慈しみに富み給う復活の主イエス・キリストをこの世にお遣わしくくださった神さま、あなたの聖名を褒め称えます。

神さま、あなたは今日も夫々に新しい朝を備えてくださり、一人ひとりの名を呼び、教会へと、ライヴ配信へと招いてくださいました。愛する兄弟姉妹と共にあなたの礼拝に与ることが許されましたことを感謝致します。今献げるこの礼拝が神さまご自身の栄光が顕される礼拝となりますよう御霊を以てこの所に臨んでいてくださいますように祈ります。

教会の頭である神さま、あなたは復活の主日に私たちの群れに新しく二人の兄弟を増し加えてくださいました。喜びを以て感謝致します。こうして新しくされた私たちの教会には、あなたによって必要な備えが為されています。新しい年度の歩みがあなたの御計画のもとに御心に合ったものになりますよう、教会員が互いに思いやり、愛をもって連帯することが出来ますように。また公同の教会として働きを為すことが出来ますように。あなたが御言葉をお示しくくださり聖霊の導きが豊かにありますように祈ります。

神さま、先の主日に、あなたの御用のために働かれた私たちの先達を祈念し祈りを合わせることを許されましたことを感謝致します。そしてあなたの御許に姉妹が旅立たれた知らせがありました。姉妹の地上でのお働きと信仰の歩みを祝福して下さいますよう。あなたの御許に旅立たれた教会創立からの先達お一人お一人のお働きは、あなたの御恵に他ならず、あなたのお導きにより信濃町教会が主の教会として 100 年の時、この世での働きを続けて来られたことを感謝し、これからもあなたの教会として歩むことが出来るよう祈りを合わせて 100 周年記念の事業に会員夫々が参加出来ますようにと願います。

私たち一人ひとりを捉え、信仰を与えてくださっている神さま、あなたは主イエス・キリストの十字架と復活により死を滅ぼし、私たちを新しくあなたの愛に生きる者としてくださいました。心より感謝致します。けれども過ぐる一週間、多くの罪を重ねてしまいましたことを御前に告白致します。あなたの御旨に背くことが多くあったことをお赦しください。あなたの慈しみにより古いものを脱ぎ捨てさせ、私たちを新しいものへと造り替えて新しい命を得させてください。

この世の支配者である神さま、今も世界の各地で戦争や紛争が絶えません。戦禍は益々大きくなり、戦争に加わる国も増えています。あなたが介入して国々の為政者を平和への道へと導いてください。戦争を遠く離れた所での出来事ではなく、日本の歴史の記憶を通して、自分のこととして捉えることが出来ますように私たちをお導き下さい。そして私たちの罪が今もなお、あなたの平和を脅かしていることをお赦しください。慈しみを以て私たちをあなたの平和のために用いてください。小さい私たち、一人ひ

とりに為すべきことをお示してください。傷つき分断され、弱くされ、孤独にされ、艱難の中におられる方々に寄り添い、あなたの福音を宣べ伝えることが出来るように知恵と勇気をお与えください。一人ひとりの尊厳があなたの愛と平和により回復されますように。また次々に興る各地での地震により被災された方々、東日本大震災、および、福島第一原子力発電所事故により苦難を負われた方々に心を寄せ、命と環境を守るための働きの支援に、あなたの御心が示されますように願います。聖霊の導きとあなたのお支えを祈ります。

愛に富み給う神さま、本日この礼拝を共に与ることが出来ない兄弟姉妹をあなたの豊かな愛と御恵みで満たしてください。私たち教会の肢々をあなたの愛によって一つとしてください。様々の困難を抱える者、深い悲しみの中にある者、あなたの救いとお支えを必要としている全ての者に、あなたの慈しみと励ましと祝福がありますように主の平安を祈ります。

今日の説教者を感謝致します。御言葉を取り次ぐ牧者が聖霊により強められ大胆にあなたの御言葉が語られますように。聴く私たちの心の目と耳を開かせてください。語られた御言葉が新しい糧となり、一人ひとりがあなたによって守られる一週間を過ごし、次週も再び主の日の礼拝に集うことが出来ますように聖霊の導きを祈ります。

全てが主の御心になりますように。この祈りを主イエス・キリストの聖名によって御前にお献げ致します。アーメン。

讚美歌：472「朝ごとに主は」

説教：「信仰によって生きる」

佃 雅之

今日の個所で『コリントの信徒への手紙一』を読み終わります。キリストの使徒パウロは、手紙を通して、キリストの十字架と復活の出来事を土台にした無限の教えを語ってきました。私たちが今朝改めて覚えておきたいことは、「この手紙が教会の礼拝で読まれた」ということです。これはパウロの説教なのです。

パウロは説教を終えるにあたって、これまで語ってきたことを簡潔な言葉で纏めています。「目を覚ましていなさい。信仰に基づいてしっかり立ちなさい。雄々しく強く生きなさい。何事も愛をもって行いなさい。」これらの言葉は、主イエス・キリストとの交わりの中に生きる教会、キリスト者の基本姿勢を示しています。

「目を覚ます」という言葉(Γρηγορέω- γρηγορέω)は、「眠らないこと」とも訳せますが、目を覚ましてはいても眠っていないだけでボンヤリしていて、見るべきものをしっかりと捉えていなければ無意味です。何を見ながら生きているのか、何処を目指して生きているのか、何も見えない状態でフラフラしていたのでは「目を覚ましている」とは言えません。

「目を覚ます」は、「酔わないでいる」ことだとも言われます。私たちは何に酔うのでしょうか。自分の知恵、信仰の深さ、長さでしょうか。この世の権力や富でしょうか。しかし、この世のものに酔ったなら、神の子として歩み始めた信仰生活が何時の間にか、この世の事情に押し流されて曖昧になっていくでしょう。ですからパウロは言います。「目を覚ましていなさい。」私たちが「目を覚まして」、しっかりと見るべきものは、主が再び来てくださる世界、終末、終わりの時、その日に備える態度が「目を覚ましている」ということです。私たちは終末の希望に生きる者として、現状に自己満足することなく、現

実の厳しさや不条理にも絶望することなく、「信仰に基づいてしっかり立って」いなければなりません。

コリント教会はグラついていました。人間の都合で世の知恵を頼りにしてしまったからです。「信仰に立つ」ということは、自分にとって日々の生活を送るのに不都合なことが多いと感じる人がいます。しかしパウロは不都合を感じても、かえって生きづらさを抱えることになったとしても、立つべきところに立って、向かうべきところに目を留めることが出来るように「雄々しく強くあれ」と言います。弱い私たちがどうすれば強くなれるのか、どうすれば揺れ動くことなく「信仰に立って」いることが出来るのでしょうか。パウロの語る「強くあれ(κραταίω)」と言う言葉には、「神の力、聖霊の力に充たされていなさい」という意味が込められています。私たちを強くするのはバプテスマの恵みによって与えられ、聖餐によって更新される主の約束と聖霊の働きによります。「雄々しく強くある」というのは、「主なる神への信頼だけで生きよ」ということです。「人間の言葉に惑わされたりせず、あなたを活かして、あなたを導いてくださる聖霊に信頼して、日々私たちに注がれている主の恵みによって生きる」と言っているのです。

「目を覚まし、信仰に立ち、雄々しく強く生きる」、そのために不可欠なものがある。決して忘れてはならないものがある。それが「愛」(ἄγαπη)です。どれほど立派なものが沢山あっても、それらに貫く「愛」がないなら、全ては無に等しい。あなたがどれほど賢くても、勇敢であっても「愛」がないなら、その立派なものが却って災いとなって争いを引き起こし、分裂を招く、それが教会の現実です。「雄々しく強く」とは決して周囲の人間を傷つけたり、押しさえつける様な強さを言っているのではないのです。キリスト者の強さは愛の強さに他ありません。だから「何事も愛を以て行いなさい」とパウロは言います。

しかし、これらの勧めの言葉を実際に具体的な生活の中で、人との関係において実現することは、そう易しいことではないでしょう。現実には複雑で煩わしい問題があるものです。親子関係も、夫婦関係も、複雑な問題を抱えていることが多く、忍耐と工夫が求められるということはあるでしょう。肉体においても、価値観や常識においても、夫々に違いがあるものです。とても他者には理解できないような個性をもって生きているのが私たちです。今日此処に集まって礼拝を献げている私たちも、夫々に違う人生、全く違う日常を生きています。コリント教会も、霊に酔う者あり、知識を昂ぶる者あり、賜物を誇る者が多くいた教会でした。豊かな者、貧しい者、ユダヤ人、ギリシア人、多様な価値観を以ている人たちの中で、それでも何とか信仰によって一致させたいとパウロは願っています。その願いを込めて、「目を覚ましていなさい。信仰に基づいてしっかり立ちなさい。雄々しく強く生きなさい。何事も愛をもって行いなさい。」と語りかけます。この一つひとつの簡潔な言葉には「信仰に生きる」という実践的な道が集中的に語られているのであります。

パウロはこの手紙の結びで、明らかにこれまで語り教えてきた福音を、行動に移すことを願っています。説教者が説教をすることの目的の一つは、語られた福音を、私たちが生活の中で具体的に活かし、この世でキリストを証しすることが出来るようにするためです。コリント教会の中にも福音に生きている人たちが居ました。具体的な模範とすべき人として「ステファナ」の名前を挙げて、「アカイア州の初穂」と呼びます。ステファナは、パウロが初めてコリントに伝道したときにパウロ自身が洗礼を受けた数少ない人の一人です。

但し、彼らを「初穂」と呼ぶのは時間的な序列として、信仰をもったのが早かったからでも、パウロ自身が洗礼を施したからでもありません。教会の基礎、土台となった人たちであるからです。彼らの教会での働きは、目立たないところでの働きであったと言われていました。伝道する教会には影の奉仕者が居る者です。決して目立たないけれど立派な働きをして伝道を陰から支えた人たちが多く居るのです。教会を支えているのは、この世の知識をため込んでいる人でも、大声で正論を振りかざす人でもなく、決して目立たない奉仕者なのです。黙々と、淡々と、誠実に主の仕事の仕えている人を重んじることを忘れない。今、教会の中で必要な働きを見抜いて、時間と労働を献げる人、そのような奉仕者に従う教会が真のキリストの教会です。

ステファナの一家を「労を惜しまず世話をしてくれた」とパウロは紹介しています。この言葉が重要です。原文(エイ・ディアコニア・ト・ハギオス・イタカン・ハアウトス εις διακονίαν τοῖς ἁγίοις ἔταξαν ἑαυτούς)のために 奉仕 冠詞 聖い 責任を担う 自分たち自身)では、「奉仕のために、自分自身を任命した」と書かれています。教会にはいろいろな働きがあります。“必要な働きを自分で見つけて、自分で自分をその務めに任じた”というのです。“全く自発的に役割を担った、働きに仕えた”という言い方です。だから、「どうか、あなたがたもこの人たちや、彼らと一緒に働き、労苦してきたすべての人々に従ってください。」と願うのです。主キリストが期待されていることは、ステファナの一家の人々のように、自ら自分に出来ることを担っていくことです。“何か些細なことでも、一日でも、一回でも、私にも参加できることが、私にも協力できることがあるはず”です。その心を持つことが同じ教会に属する者の責任でしょう。私たちは誰一人変わることなく、何時でも、何処にあって、キリストの僕であり、キリストに仕える者であるはずです。

ステファナに続いて、「フォルトナト」と「アカイコ」の名前も挙げられています。彼らは、今、エフェソでこの手紙を書いているパウロのところへ、コリントで興っていることを知らせに来てくれた人たちのようです。この人たちは、「わたしとあなたがたを元気づけてくれた」と紹介されています。「元気づけてくれた(アナバウアー ἀναπαύω)」という言葉は「霊を休ませてくれた」、「霊をリフレッシュさせてくれた」と訳すことが出来ます。彼らの献身的な働きは、「聖霊を感じさせるものであった」と言うのです。パウロは、“教会の中の小さな働きを見逃すことなく、このような人たちを重んじてください。”と願っています。「重んじてください(エビギノスコ ἐπιγινώσκω)」という言葉は「見分ける、識別する、発見する」という言葉です。本来、尊敬するに値しない人が重んじられ、重んじられるべき人が軽んじられて、教会の中で正当な評価を受けていないなら、それは教会にとって恥ずかしいこととなります。

最後に名前が挙げられていますのは「アキラとプリスカ」です。この二人は、夫婦でパウロと一緒に伝道をしました。アキラとプリスカは自分の家を開放して教会にしました。“二人は孤独に悩む人、誘惑に苦しむ人、悲しみと絶望の中にある人たちを迎え入れて、自分の家を安息と交わりの場とした”と言われていました。自宅を平和の宿、温かな家、祈りの家としたのです。パウロが手紙の最後に、この人たちの名前を挙げたのは個人的に親しい関係であったからではありません。“キリストにあって”であります。パウロが此処で名前を挙げている人たちは、キリスト・イエスにあって協力者となった人たちです。“主にあって、主に結ばれている人”という意味です。もう少し具体的に言えば、“主の為に労苦して働いている人々”のことです。夫々に違いがあっても、あるいは離れていたとしても、今も隣にいるかのように思い出すことが出来る。パウロは確

かなリアリティを感じながら、“あの人も、この人も、そして私をも、キリスト・イエスが生かして用いてくださっている”、活き活きとした命の交わりを感じながら手紙の最後の挨拶を書いています。

パウロは主に結ばれた私たちに、「聖なる口づけによって互いに挨拶を交わしなさい」と言います。パウロが伝えたいことは、私たちが「口づけ」という言葉から想像するような人間的なことではありません。お互いが本当に知り合い、本当に愛し合う交わりを意味しています。具体的に言えば、礼拝を共にすることであり、一緒に聖餐に与ることでもあります。共に主を礼拝し、聖餐に与ることは、「口づけ」をするほど親しい交わりだということです。

キリストの教会はパウロの時代から「マラナ・タ」(主よ、来てください)と祈る群れです。“私たちが生きている間に主は来られる”、このことは教会の変わることのない希望であります。パウロはキリストの再臨の時を本当に望んでいるから、「主を愛(フィレオー φιλέω)さない者は、神から見捨てられるがいい。」とまで言います。「主を愛する者」とは“信仰を言い表す者、洗礼を受けている者”と聞いていでしょう。「見捨てられるがいい」というのは“呪われよ(Ε-το-アナテマ ἕτω ἀνάθεμα)”という言葉です。“主を愛し、何時も感謝して、いつも喜んでいる”こと、これが信仰者として決定的なことでもあります。だから“主を愛さない者は見捨てられるがいい、呪われよ”と書くのです。

主を愛する者は教会を愛する者でもあります。キリストへの愛は、キリストの体である教会を愛することと深く結びついているのは当然のことです。主は愛するが教会は愛さない、それでは実際主を愛していることにはならないのです。主を愛する者は必然的に教会を造り上げようとする。主を愛さない者は教会を破壊します。だから“呪われよ”となるのです。“主を愛する人になって欲しい、主を愛さないなら、あなたは神から見放されてしまう”と私たちは伝えなければなりません。

「主を愛さない者は神から見捨てられるがいい」というパウロの言葉は、コリント教会への深い愛と深い配慮が込められている言葉です。誰一人、信仰の道から離れて欲しくない。全ての人が復活のキリストに出逢って欲しいのです。この手紙の第13章で示した「信仰と、希望と、愛(アガペー ἀγάπη)、この三つはいつまでも残る。その中で最も大なるものは愛(アガペー ἀγάπη)である(13節)」との言葉が、この手紙全体を貫いています。

この神の愛に信頼して、信仰によって生きるなら、呪われた人生ではなく、祝福された人生が私たちに用意されています。キリストの恵み、神の愛、聖霊が、私たちの人生を守り導いてくださいます。

お祈りを致します。

聖なる神、尽きることのない憐みを以て、今日も私たちをあなたのものとして招き、あなたの御言葉と霊に触れさせてくださいましたことを心から感謝致します。

『コリントの信徒への手紙一』を読み始めて二年余り、あなたに守られて、一つの手紙を読み抜くことが出来ましたことを重ねて感謝致します。私たちはキリスト・イエスを信じる信仰によって祝福された人生を生きることが許されています。どうかあなたの恵みの中に私たちを留まらせてください。何時も感謝と喜びを以てあなたが注いでくださる恵みを受け留めることが出来ますように。私たちの教会が全てのことをあなたの愛の内に行うことが出来ますように。

私たちの救い主、イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讚美歌:573「光かけよ、主のみ民よ」

献金・感謝(大隈道雄)・主の祈り(讚美歌21 93-5A)

ご在天の父なる神さま、本日も私たちを夫々の生活の場から礼拝を献げる場へと向かう、その時を与えてくださいましたことを感謝致します。

二年半続けて『コリントの信徒への手紙一』が講壇から語られて参りました。本日、特に“「信仰によって生きる」とはどういうことか”ということを変更して示されました。

私たちは夫々にあなたから使命を、また信仰の種を与えられて夫々に育てられ、育まれて今、ここに、こうしております。どうか私たちが嵐の中、また雌伏せざるを得ない時にありましても、あなたに希望を置いて、天を見上げて、上を向いて、勇気することが出来ますようにお導き下さい。弱っているとき、苦しんでいるとき、不安の中にいる時、罪の誘惑の中にいる時に、どうか私たちに光を見せてください。そして私たち自身が勇気づけられ、聖められて、周りの苦しんでいる方々を照らし導く強さが与えられますように。私たちが“信仰によって生きる”とは富を貪り、自分のためだけに生きることではないことをどうか学ばせてくださいますように。

今日此処に、あなたの御前に私たちが恵まれている物の中から献げることが許されました。どうかあなたの御用のためにお使いください。

この一週間の一巡り、「主の祈り」を以て始めさせてください。

「主の祈り」…アーメン。

派遣: 讚美歌91「神の恵みゆたかに受けて」

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。
アーメン。

報告:(1)ボックス配布資料「5/26 教会総会議員名簿」確認のお願い、訂正事項があれば牧師まで連絡を。4/12以降聖餐を受けられた方、5/5 主日礼拝に出席、聖餐を受けられた方を追加して議員を確定する。(2)『死と葬儀についての私の願い』文書の提出についての再度のお願い。これは本人のみならず家族にとっても大切なこと。記入用紙が必要な方は牧会委員に申し出のこと。(3)ボックス配布資料「2024年度「あなたの教友は」」の確認と活用をお願い。(3)旧会堂講壇腰板を利用して作成した200個の十字架が14個残っている。頒価1300円(会堂建築献金繰入)、希望者は高橋智津子長老まで。

後奏:「天にいます我らの父よ」(J.S.バッハ)